

## 審査の結果の要旨

氏名 平井 祐理

本研究では、大学発ベンチャーが成長するための要因を明らかにすることを目的として、Resource-Based View 及び Social Capital Theory を基に抽出された因子として、①創出母体としての大学、②VC からの投資、③ビジネスに関する知識、という 3 つの要因に関係する変数を説明変数とし、業績の指標としては、生存の指標として①正社員数対数、財務的な業績の指標として②売上高対数、また総合的な業績の指標として③正社員数対数と売上高対数の和の 3 つの被説明変数を使用した分析を行なった。

これにより得られた結果を総合的に考察することで、大学発ベンチャーを成功に導く 4 つの要因が浮かび上がった。その第一は大学及び VC からの資金の獲得である。外部資金の獲得は設備や人的資本といった様々な資源の確保を可能にするため、経営資源の乏しい大学発ベンチャーが成功するには不可欠な要因であるということが示唆された。また第二は大学外出身者の経営参加である。一般的にアーリーな技術を利用している場合の多い大学発ベンチャーでは、そうした技術を利益の得られる商品やサービスに変換しなければならない中で、追加的技術開発に加え、顧客のニーズを拾い上げ、市場を選択するといった多くのビジネススキルが必要である。そのため、教育・研究機関である大学内出身の人材よりも、産業界で経験を積んだ大学外出身の人材が経営に参加することが重要である。第三は経営メンバー及び社外ネットワークにおける多様性である。非冗長的な社会的ネットワークからは、そうしたネットワークは間接的により多くの人物とつながっており、また異なった情報源を持っているために、多量で多様な情報を獲得することができる。大学発ベンチャーでは、経営チームにおいても社会的ネットワークにおいても、多様性を重視し、幅広い情報や知識にアクセスできることが重要であることが示された。第四は、経営メンバー及び社外アドバイザーとの公私のバランスのとれたコミュニケーションである。社内の経営チームメンバーにおいても社外ネットワークのアドバイザーにおいても、必要な知識やアドバイスを引き出し高い業績を達成するためには、そうした人物とビジネス上、プライベート上のどちらかの関係を深めれば良いのではなく、公私ともにバランスのとれたコミュニケーションをとることが重要であることが示された。

既往の大学発ベンチャーに関する研究では、どのように大学から大学発ベン

チャーが創出されるのかという創出のプロセスに焦点が当てられてきており、創出後の大学発ベンチャーの成長や業績といった発展のプロセスに関する知見が乏しかった。我が国の大学発ベンチャーにおいても政府の振興施策によって創出数は増えたが、成長性に乏しい点が問題視されてきたことを見ても、大学発ベンチャーが如何にして成長できるのかという問いに答えることは重要であることは明白である。

本研究においては、**Upper echelons perspective** や社会的ネットワーク理論といったこれまで大学発ベンチャーの研究に用いられてこなかった新たな理論的フレームワークを用いて業績への影響を分析することで、大学発ベンチャーの成功に重要な要因を実証的に明らかにすることができたことは評価できる。また本研究では、**Upper echelons perspective** 及び社会的ネットワーク理論について新たな見解を加えることができた。**Upper echelons perspective** に関する既往の研究では、トップマネジメントチームのデモグラフィック特性はプロセス要因の影響要因として扱われ、チームの同質性は頻繁なコミュニケーションと関係づけられていた。しかし、本研究の結果からは、トップマネジメントチームの影響では、デモグラフィック特性とプロセス要因は別の要因として検証されるべきであるということが示唆されたことは興味深い。また社会的ネットワーク理論に関する既往の研究では、構造的埋め込みの視点である非冗長性と関係的埋め込みの視点である紐帯の弱さは相関性の高いものとして考えられてきた。しかし、構造的埋め込みに関しては非冗長的である方が、関係的埋め込みに関してはビジネス上とプライベート上の紐帯の強さの交互作用が、業績に正の影響を与えるという本研究の結果から、企業業績に関する社会的ネットワークの影響においては、構造的埋め込みと関係的埋め込みは別の要因として検証されるべきであるということが示されていることは、今後の同分野の研究の発展を期待させる。

本論文に関して、審査委員からは、新規で有用な興味深い研究であると評価される一方、**Resource-Based View** と **Social Capital Theory** の位置づけについての指摘や、また別々の回帰分析として行われた説明変数間の関係について極力考察すること、**Structural holes** の理論との関係が不明確などの指摘があったが、これらに関する改訂は適切に行なわれた。よって本論文は、博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。